

その十四 再会

課長の長い電話が終わった。溜息のあと受話器を置くとうつつむく。しばらくして煙草に火をつけて一服してから何かを思い出したのように顔を上げる。

「二世くん。ちよつと」

公害啓蒙用のリーフレットに使う写真の選定をしていたが「ハイ」と応えて課長の前に立つ。

この四月から、ここ、豊中市役所に勤務している。滅多にない中途採用試験に運良く合格した。経歴がものを言ったのか、広報課に配属された。まだ慣れてないが春の日差しが気怠い。公務員は三日やったら辞められないとは、よく言ったものだ。

「二世くん」

少なくなった頭の毛を労るように撫でながら課長が続ける。

「確か、『守電通』……じゃなかった『モリ・PR……』に務めていたな」

気怠さが消えた。「守電通」と言うのは「モリ・PR・コーポレーション」の旧社名だ。

「明日、モリ・PR……何だっけ。とにかくそこへ行く。同行してくれ」

「退職した会社に行くのは、はばかります」

「なんや？ 首になつたんか？」

「そうではありませんが……」

無神経な課長を睨みたかったが、逆に睨まれる。

「じゃあ、何でや」

返事をしないので課長は老眼鏡をずらして小さな声で続ける。

「実はな、さつきの電話……」

煙でしみた目を細めて短くなつた煙草を吸う。

「……府会議員の中原先生ナカハラからでな。この先生の娘はんのご主人が守電通モリデンツウの……知ってるやろ」別に驚きはしない。「結婚したのか」と言う程度の感慨しか起こらない。だから反応しなかつた。

「どうに万博も終わったし、オイルショックが起こりそうやから広告業界も大変らしい……」

それにしても、なぜ前職の会社と関わりを持たなければならぬんだ。俺は今、公務員だ。

「当市の広報関係の印刷物は『守電通』時代からのお付き合いで一括して……オイ、二世フタセくん、聞いたるんか」

「ハイ」

モリ・P Rと豊中市役所や広報課との関係は知らないが、どうやら競争入札ではないようだ。一言で言えば「癒着ユウセツ」だ。経緯イキワザは知らないがモリ・P Rを庇カバう義理はない。それに同行したくないから思い切つて意見する。

「と言う事は、随意契約ズイイなんですか」

この言葉に課長はうろたえる。俺を世間知らずの新卒採用と誤っていたようだ。シワが初老の額に刻まれる。

「確かに『守電通』時代、不明朗な取引もあった……かも知れんが、前任がした事。これからは是々非々だ。だから同行してくれ」

筋が通った説明ではない。ここで逆らって首になっても構わない。就職したばかりだ。失うものはない。採用時に気が付いたが公務員には失業保険がない。役所は倒産しないから失業することはない。しかも重大な不祥事を起こさない限り首にはならない。

「顔見知りの者が一杯います。それでもよろしいでしょうか」

いつの間にか係長が俺の横に立っていた。

「二世君フタセは配属されたばかり。私が行きましよう」

昨夜の歓迎会でこの係長から「広報課」は特殊な部署だと聞いていた。新卒採用ではなかった。たので色々教えてもらった。

公務員に圧力をかける議員の陳情を、どう裁くのか、あるいはどう回避するのか、課長と係長の会話を聞いていて、公務員と言えども結構大変だと妙に感心した。

席に戻る。のどかな春の陽は隣のビルに隠れて影を残すのみ。春先特有の乾いた空気が鼻から口へ抜ける。ちびつた赤エンピツ、青いインクのシミ、そして伸びた爪。影の中に俺がいる。

大学をサボった。とても行く気になれなかった。酒屋で安物のウイスキーと乾き物を買ってボロ家に帰った。すぐ酔う気になれずビートルズのレコードをプレイヤーに載せる。そして万年床という名のベッドでポヤーツと天井のシミを眺める。いつもなら、恠しい生活を送る俺を優しく包む音楽も白々しい……と言うよりただの音として耳を通り過ぎる。

常識が前面にありながらその常識が通らないこの世の中——いつの間にか酒が俺を哲学者に仕立てる。まさしく、こういう状態は逆様。逃避するための酒が逆に狭い牢屋へ追い込む。

押し付けがましい課長の顔が浮かぶ。課長と係長のやりとりが頭の中でぐるぐると回る。高卒の課長は市職員として一途に勤め上げてきた。まもなく定年を迎える。課長とはかなりの年齢差があるが、俺も守の会社で一生を終えるつもりだった。課長と同じように他の選択肢なんか考えた事がなかった。でも断ち切った。それなのに待ち構えていた偶然が俺を縛ろうとしている。

——なんで今さら夏子がいる守の会社に行かなきゃならないんだ？

どう考えて課長が俺に命令を出したのか分からない。これが役所の意思決定システムだと理解できるはずもない。とにかく同行を回避できなかった。

グツと水割りを飲み干す。アルコールが全身に行き渡る。

課長のように長い経験から得た理性——そんな理性の過信そのものが酔態に見える。けれど

*

俺のような若輩者が意地を振り回して啖呵^{ダシカ}を切るのも立派な酔いどれ状態だ。

政治家、公務員、医者、強盗……誰も彼もが酔い潰れているこの世の中。素面^{シラフ}だったら恥ずかしくて歩く事さえ出来ないはず……これも酔っ払いの戯言^{ウソコト}。

事実は小説より奇なりと言うが偶然とは恐ろしい。逢った事、別れた事。愛した事、憎んだ事……因果めいた物語に手心が加えられた現実には因果が震えるほど残酷な結末を作り上げる。変転、推移、位相など単なる偶然なのに、糸を操る者が居るような不気味な気配。強いられるのか？ 偶然を否定してもこの強制の鎖から逃れる事はできない。悟りが本業の坊主までが酔っているこの世の中。鎖を断ち切ることは不可能。

守^{モリ}とはサッパリと関係を断ち切った。それでも強いられる。川の流れを人生とすれば途中の様々な滝は決断か？ 烏来^{ウライ}瀑布のようなダイナミックな滝もあるが、所詮、上から下へ落ちる流れのひとつに過ぎない。そこに決断は存在するのか。決断したと錯覚しているだけ。だから酔態そのもの。かと言って酔わなければやって行けない。

でも無性に恐ろしい。恐怖に限りなく近い不安は何故に……永久を乞う有限の身だから生じるのか。どうやら不安は偶然がもたらすものではなさそうだ。

人間なんて弱くて貧しいもの。人間の弱さ——「醜^{ウツケイ}くさ」さえも清く果敢に感じられるほどの弱さ。国王、聖者、富者、学者までが哀れで滑稽^{コケイ}に見える貧しさ。その先にあるもの——淋しさ。そう、淋しい事だけは確か。

生きる事の素晴らしさを見つけたなんてあり得ない。生きたいという願望など淋しさでいつも曇っている。それはセンチメンタルな理想家の夢に過ぎない。しかし、そんな理想家を嘲笑えようか。

隙間風のように淋しさを呼び込むモノはいったい何か。偶然？ 必然？ どちらも捕らえるどころがない代名詞。それらは対峙しながらモノの内と外を示しているだけ。そんなモノを今まで大事にしてきた。まさに酔っ払いの寝言、暴言、そう酔眼だ。何一つ確かなものなんてない。確かなものなんて目にする事はできない。何もかも……？

でも、欲しい——安心できる何かを。火花が散るような一瞬でありながら永遠なるものを。

*

雨音が聞こえる。ポツンという音がする。スタンドの灯を入れる。また、ポツンと音がする。狭い部屋が広く感じられるほどの小さなスタンドの光。そんな貧弱な光を受けて本棚の小さな緑泥片岩の欠片が輝いている。起き上がってその欠片を持つ。その横に置いていた分厚い封筒を確認するが濡れてはいなかった。

「波江……」

脳裏に瀬戸島の小さな港が浮かぶ。あの時撮った写真の一コマ一コマが甦る。

偶然、波江の愛の姿を見た。偶然？ 俺は偶然に翻弄ホロボロされているのか。センチメンタルな理想家とは俺の事だったのか。でも確かに見た。波江は決断した。瞬間的に彼女は永遠なるもの

を抱きしめた。この欠片は波江そのもの。普段は何の変哲もない石だけど濡れるとハツとするような鮮やかな緑色になる。

冬見……現実の邪悪な拡散よりも夢の中ですべてを凝集させて岩手山の麓から一筋の白い煙となつて天に昇つた。

オヤジ……子供相手とは言え、いや子ども相手だから精一杯生きている。女の子と指切りげまんしたオヤジは本当にうれしそうだった。

知秋……あんなに慕ってくれたけど、別れた事は彼女のためには良かった。

そして夏子……燃え尽きるような恋をしたが永遠につながることはなかった。それどころか、今、お先真つ暗な俺の人生に守と共に立ちはだかる。

掌の緑泥片岩の欠片に落ちる雫。単なる雨漏りだった。分厚い封筒を手にする。この封筒は六甲駅前キリで守から受け取ったものだ。

美英子……六甲駅に来なかった。

*

勝手知つたるモリ・P R 本社の地下駐車場とは言え、初めて運転する乗り慣れない役所のボロ車、腹をくくつたとは言え不安だらけで汗ばんだ掌、ハンドル操作がうまくできない。しかし、いつの間にか車から降りていた。いつの間にか鞆を小脇に抱えて階段を上がつっていた。ただ、課長に「こちらです」と案内する気遣いは忘れていた。

昔の仲間の意外そうな声の中、苦笑を返事にして通り抜ける。そして春の光が差し込んでいゝるのに冷え冷えとした社長室に入った。出迎える守モリがいた。その横には夏子、いや、守夫人モリが課長に頭を下げる。二人とも俺に驚かなかつた。

——俺が来る事は分かつていた？ 誰が漏らした？

「広報課、課長の田畑です」

——あつ、そうか。課長か

俺は課長の背中からこれ以上、下がれないところまで後ずさりする。守モリと課長の名刺交換が始まる。採用されたばかりの俺はまだ名刺を持つていない。ある意味助かつた。

守モリは課長にソファアを勧めて座るのを待つて腰を下ろす。課長がすぐ口火を切る。

「ご存じかと思いますが、実は昨日、社長様のお義父様……中原先生から……」

世間話から始まると思つていたのか守モリの表情は変化すると言うより驚きに近い。それなりの情報収集してはいたはず。だがお膳立てまでは知らなかつたようだ。

——それなら何故夏子が同席してるんだ。まだ大学生の筈

お茶が運ばれてくる。そのお茶を夏子がテーブルに置く。俺の分は端に置かれた。茶碗から薄い湯気が出ている。何と重苦しい湯気なんだろう。

「ありがたいお話ですので、ここでご返事させていただければいいのでしょうか……わざわざお越しいただいて誠に失礼なのですが……」

言葉が空回りしている。さすがの守も返事に窮する。

「……義父が気を回して課長様に連絡したようですが、私もついこの間、社長に就任したばかり。返事は後日させていたかどうかということですが、いかがでしょうか」

驚きながら課長が茶碗を置く。守は返事を待つ事なくかなり強い視線を夏子に向ける。

「この話、聞いていたか？」

夏子は少し間を置く。その分を取り返すかのように首を強く横に振ってから答える。

「いいえ」

いずれにしても守は課長の来社理由までは知らなかったか、知らされてなかった。ゆっくりと視線を課長に戻して続ける。

「改めて広報課に赴いて返事をさせていただきます。今日のところは……」

意を決して守は立ち上がると身体ごと課長に頭を下げる。思わぬ対応に課長は黙ったまま。

「つまらぬ会社ですが、折角お越しいただいたので社内見学でも……もちろん、時間が許せばですが」

夏子が慌てて名刺を取り出すと課長に近づく。

「守夏子と申します。よろしかったら……どうぞ、こちらへ」

肩書きはないのだろう。名前まで告げる。課長は立ち上がって守に一礼してから夏子に手招きされるとドアに向かう。何とも言えない美しい後ろ姿。シワだらけの背広が哀れに見える課

長に声を掛ける。

「駐車場で待機します」

課長の姿が消えると、すぐ守が近づいてくる。

「二世」

社長室を出ようとする俺の肩に手がかかる。部屋には二人しかいない。俺は鞆から分厚い封筒を取り出す。

「断るつもりでいるから安心してくれ。それよりも……」

守は一旦、言葉を切つてハンカチで額の汗を拭きながら正面に立つ。

「どう言えればいいのか……」

次の瞬間、守が屈んで土下座する。俺は驚きのあまり何も言えない。

「話を聞いてくれないか？ 頼む。このとおりだ」

ゆっくりと守が立ち上がる。すべてが過去になった今、言い訳さえすれば胸のつかえが取れるとでも思っているのだろう。ドアに向かう。

「待ってくれ」

追い越すとドアをロックして俺の前に立つ。

「話を聞いてくれ」

「始めからそうすれば良かった。後味が悪すぎる」

ドアロックを外そうとする俺の手を握って引かない。立ったまま会話を続ける。

「神戸のコンサート以来、迷惑ばかり掛けていつも助けてもらってたなあ」

もう一度ハンカチで額の汗を拭う。思い出話で距離を詰めようとするのは常套手段。でも脳裏には写真集を忙しそうに売りさばく美英子の顔が浮かぶ。

「実はあの時、夏子からお宅に事情を説明させるつもりやった……」

俺は懐かしい窓の外の景色に視線を逃そうとする。ところが何と窓ガラスに視線が阻まれてそこにうつすらと過去が写り始める。

*

全国でも有数の大舞台を持つ神戸学生会館の楽屋はそれなりの設備を持つ。メイク室や着替室などそれぞれ五、六部屋以上、男女別のシャワー室やトイレや補助室も複数ある。とは言ってもそれぞれの部屋（トイレとシャワー室を除いて）は低いドアあるいはカーテンで仕切られている程度で視線は遮られるが意外と開放的。とは言え誰でも楽屋に出入りできない。

着替室で守と夏子が話し込んでいる。多少の会話はセリフの練習ぐらいにしか聞こえないから気にかける者はいない。やがて話がまとまり部屋を出る二人。同時に近くでドアが閉まる音がする。

「僕らの話、春夜に聞かれていた。動転したが打ち合わせどおり夏子は照明室で二世に……」
俺は遮る。

「お前が、言えばいい話や」

だが、守は持論を展開する。

「……その時は僕は春夜を、夏子はお宅を、説得と言おうか……今、思えば……」

なぜ夏子は守の指示に従ったのか。何らかの事情が……と思うと今度は春夜の顔が浮かぶ。

「シヨックやつたやろうな」

ガードを下げてしまう。それを見越したのか、守は大きく息を吸ってから春夜に触れずに夏子との経緯を吐露する。

「夏子が二世からなぜ離れたか……」

もうどうでもいい事なのに一気に緊張する。見たくなければ目を閉じればいいが、聞きたくなくても耳は閉じられない。

「もう、あれから四年になる。お宅と夏子が別れたほんの数日前、万博を盛り上げる会合の二次会で議員や役所の偉いさんが出席する懇親会が……」

*

出席者はそれなりの人々で、実質政治家の資金集めのパーティだった。人数確保のため業界の経営者はもちろんのこと後継者なり政治家も子息を出席させたりした。要は賑やかな方がいい。そんな懇親会で守と夏子があるテーブルで談笑するのも自然な事だった。ところが突然夏子がワイン・グラスを落として口を押さえた。

この情景は頭の中で鮮明なまでの像を結ぶ。

「妊娠してたんか！」

守は黙って頷く。あの頃の夏子には様々な事が起こった。実の母親が亡くなり自分が養女と気付いた事。養母が入院した事。だから生理が止まっても不順だと思っただろう。しかし、選りに選って、政治家主催のパーティーで二人が一緒だったなんて……。

偶然？

それにしても、偶然がまるで生き物のように自由奔放に動いて新しい因果を創っていく！俺と守が友達になった切っ掛けも、友情が消滅する切っ掛けも、偶然が創ったものだ。

夏子は父親に俺を内緒にしなかつたが会った事はない。父親が留守の時だけ家に招いた。恐らく夏子は父親が俺にいい印象を持つていないと思っただのだろう。それに余りにも若すぎた。しかし、出張先から出した絵葉書とか年賀状で俺の名前ぐらいは知っていたはず。いや、むしろ興味津々だったはず。

守は衣服を汚した夏子を抱きかかえて休憩室に連れて行った時、飛んできた父親に何故名刺を渡した？

「君か！ 夏子と付き合っていたのは。すぐ結婚しなさい！」

*

守を押し倒して社長室を出た。どこをどう走り抜けたのかは覚えていない。気がつけば地下

駐車場にいた。すぐ分厚い封筒を持った守が息を切らせて現れる。

「二世！」

キーを付けたままの車に乗り込むとエンジンをかける。そのとき守が現れた反対側のドアから夏子と課長が駐車場に入ってくる。

「夏子！」

守の叫び声に夏子はなすすべなく立ち尽くす。異変に気付く事なく課長は車を確認して乗り込んでくる。難なくモリ・P Rから離脱した。

*

最大の疑問は夏子自身。何故父親の言葉を否定しなかった。明らかに誤解じゃないか。それよりお腹の子をどうするつもりだったのか。仮に夏子が勘当されて養子縁組を解消されても、それはそれだ。

確かに養女としての負い目はある。同じ境遇だった冬見を思い出す。それでも冬見は妊娠するために身を捧げた。

——そう「もらわれた」んだ

妊娠させたとは知らなかった俺に資格はないけど、無事に生まれたら喜んで俺は夏子とともに育てる。名実ともに夫婦になるから当たり前前の事。

しかし、夏子が結婚以外の解決策を模索した形跡はない。お腹の子の事を考えなかった？

守と結婚するより仕方がなかった？ 誤解が切つ掛けでも結婚する？ わずかな時間で愛し合える？ 場所が場所だけに何も言えなかった？ できるだけ結婚を引き延ばして何とかしようと考えた？ 俺が他に恋人をつくって気が紛れるまで待つていた？ 世間体？

よくもまあ事故も起こさずに市役所に戻れたものだ。課長を降ろして駐車場に車を止めると広報課に戻らず屋上へいく。庁舎は七階建て。屋上から眺めると春の陽差しで下界はキラキラとのんびりと輝いている。目の前の金網を超えれば下では大騒ぎになるだろう。

——あつ！ 俺が自殺すると見解が一致した。やはり世間体か

俺は夏子を忘れるために知秋と深く付き合う事はしなかった。美英子とは深く付き合わせてもらえなかった。いずれにしても理由は甲斐性がないことに尽きる。

だったら、夏子と恋に陥った時、俺に甲斐性があったのか？ もちろん「あるわけない」。でも夏子は受け入れた。拒否するどころか夏子から身体を開いた。そして俺は何も考えずに妊娠させてしまった。それを口実と俺と一緒にしろうとしたのか。でも、結果から見てそれはなかった。それなら何故受け入れた？ 一緒に戸隠奥社まで参拝したのに。

いずれにしても空を切る俺の気持ちをよそに初恋の相手が親友と一緒に俺を追い詰める。

*

知秋と春夜。この二人は逃避せずに回避した。結婚した知秋はともかく感心するのは春夜。楽屋で守と夏子二人の話を聞いた時、どんな気持ちだったのか。以前から薄々感じていたらし

いと守まもが言つてたが、それでもショックだったはず。しかし、彼女は普段とひとつも変わらずに演奏し終えた。少なくとも俺にはそう聞こえた。

そしてコンサート終了後の内輪のパーティーで、乾杯した後、一言「さようなら」と告げて去った。そしてイタリアへバイオリン留学してすぐさま国際コンクールで優勝は逃した二位入賞した。

——春夜は失恋したんじゃない

春夜とは少し違うが、あの台湾人モデル。今や世界が注目するトップモデルになった。

——完全燃焼

この二人は今も燃焼し続けている。一生に何度もチャンスがあるわけではないし、一瞬、一瞬の完全燃焼だから、とにかく前に、前に進まなければ意味がない。

俺は今でも確信している。守まもに対しても、夏子に対しても、俺自身、完全燃焼であつたと。しかし、完全燃焼が途絶えた今、燃え尽きた事になる。

完全燃焼さえすればと、自分を勇気づけて生きていこうと思つて、完全燃焼の中にこそ永遠なるものがあると確信したけど、結局大人にほんの少し近づいただけ。いや、酒に強くなつただけ。ただそれだけの事。結局、酔っ払いの戯言。

気が付けば万年床で倒れていた。